

口論の捕まえ方

—— 悩み相談サイトを対象とした 口論の開始部の発話の分析 ——

千々岩 宏晃

要旨

本稿では、創作や制度的場面とは異なる自然なやりとりにおいて、「悪態(e.g. 椎名, 2023)」や「マイクロアグレッション(e.g. Sue, 2010)」「感情的なやりとり(Gergen, 2009=2022)」等を除いた場合、口論が生起する相互行為的要因にはどのようなものがあるかを分析・記述した。結果として、2つの大きなグループに分けることができたことがわかった。1つめは、「なんでできないの？」などの疑問詞の使用が、(戦略的に)【注意】や【非難】行為として用いることが口論の理由となるグループである。2つめは、【依頼】行為として発話された「お昼ご飯買ってくる」という発話が【報告】行為として誤解されてしまうような、「言語形式と行為の関係の誤解」を起因とするグループである。また、後者は4つのタイプに下位分類できることもわかった。データは、日本語における悩み相談サイトのものである。

キーワード：相互行為、連鎖、口論、悩み相談サイト、インボライトネス

1. 研究背景とリサーチ・クエッション

滝浦(2023)が指摘するところによれば、日本語におけるインボライトネスの研究は「かなり遅れをとっており、急ぎ新しい歩みを踏み出すべき時期にある」(p.9)という。その意味で「気配り」が転じてインボライトな印象を与える研究(福島, 2023)や「インボライトな2人称代名詞(椎名, 2023)」に関する研究はその「新しい歩み」であるといえる。また、いわゆる「呪いの言葉」(上西, 2019)や「ずるい言葉」(森山, 2020; 貴戸, 2023)として取り扱われるようなマニピュレーション(cf. 三木, 2023)に関する言説もまた、その射程に含まれるであろう。その地続きには、いわゆるマイクロアグレッション(Sue, 2010)の問題が存在する。

確かに、我々は日常生活においてミスコミュニケーションを「何らかの目的に沿って起こす」というより(つまり「悪意を持って接する」より)、「思いがけず」してしまうことが多いように思う。相手に「そのようなつもりで言ったんじゃないだよ」と“弁明”したことがある人も多いだろう。しかし、発言がもたらす行為は取り消せない(古田, 2021)のである。

ただし、「悪意を持ってしまった発話」が日本語における発話である以上、その発話は様々な言語表現や言語形式によって特徴づけられ、操作可能であるだろう。とすれば、その表現や形式を回避しようと試行すること、すなわち、自らの言語活動を省察し、うまくいかなさを避

けようと努力したり工夫したりすることは可能であるだろう。例えば、「男子って全然掃除してくれない」や、「女ってなんでも悪く解釈するんだから」などのジェンダー的ステレオタイプに基づく“大きな主語(ないし主題)”を持つ総称文(和泉, 2022)について、その「負の威力(Sue, 2010)」を自覚し、回避したり、使用をたしなめたりすることは、可能であるかもしれない。

このことから、我々の社会生活において「操作可能な言語領域」が存在することが示唆される。

しかし、インボライトネス研究の遅れに呼応し、現在もまだ多数の「わだかまり」とその理由の解明が行われていない。本稿では、口論を題材に、それが発生する様子を分析・記述することで、その生起要因を記述・分析する。

2. 先行研究

本節では、口論や言い争いにかかわる先行研究を概観しつつ、先行研究が①詳細な記録を用いていない点、②制度的場面や創作を対象としている点、③共同参加のやり取りが会話の基盤であるにもかかわらず、話者と聞き手とを二分している点、の3点において不足があることを述べる。

Gergen (2009=2022) によれば、口論は展開に構造があり、また、口論のような「怒り」を含むやり取りには、開始において「正当な理由」が必要であると述べている(pp.143-146)。

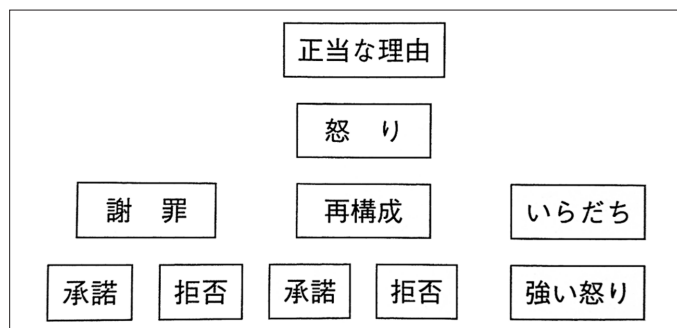


図1 「怒りのシナリオ」の見取り図(Gergen, 2009=2022より転載)

一方で、我々が「彼は感情的になった」という表現を用

いる場合、それは「普段と違ったやり方で、強い怒りや悲しみと説明できるような振る舞いをする」と同義である。すなわち、ここでの感情は、ある特定の感情に沿ってふるまうことそのものであると仮定できる。つまり、「感情的になる」ことは、あることを理由として、ふるまいの切り替えが行われた後に起こる、特定のふるまいそのものを指している。

すなわち、ここで解明しなければならないのは、「なぜ我々は怒るのか」ということではなく、「口論への切り替えが行われるような正当な理由」というのは、会話の参加者にとってどのように正当なのかを問うことである。これは、先述の「うまくいかなさ」の形式的側面に他ならない。

ただし、口論のように構造や展開を持つ事象であるのにもかかわらず、ある出来事を想像したり、概要を分析したり、その一部の発話のみを取り出して分析するだけでは、その過程が不

透明になってしまう。「正当な理由」を精確に記述しようとするのであれば、過程、すなわち時系列に応じた会話参加者のやり取りの記録が必要となる。

この「展開」や「時系列」と類似のものを扱った研究に、池田(2018)がある。池田は、オースティン(Austin, 1962)を援用しつつ、哲学ゼミの場における男性教員の発話である「女性は哲学研究に向いていない」という(思考実験的)発話を分析している。

池田(2018)の特筆すべき点は、言語行為論におけるいわゆる発話内行為の分析に加え、「会話の進行」に着目しているところである。池田(2018)は、「反論や問い返しが難しいゼミの場において、教員側からこの発話がなされた」という文脈を分析の中で重視している。

この文脈において、当該の発話は「教室内で、哲学を学ぶ者(研究者)として女性学生を男性学生よりも劣った地位に置く」という差別的信念の共有を強いる発話であり、女性を男性に従属させるハラスメントであると結論付けている。さらに、それを聞いた男性学生もまた、教員に対して沈黙することでその信念を追認し、ハラスメントを容認しているという、ハラスメントが生成される過程の渦中にあることが指摘されている。

池田(2018)の分析は、従来の言語行為に加えて、その発話が行われる「場」を考慮に入れることで、ハラスメント発話がそのように認識される道筋を示しつつ、より実証性を高めようとしていることが特徴的である。一方で、この分析は大学の授業場面という既存の権力関係を参照する制度的な場面という点で、本稿のターゲットとするところとはやや異なる対象を持っている。

この続きに、そもそもインポライテネス研究においてなにを研究対象とするのかの問題がある。Culpepper (2011)、椎名(2023)、貴戸(2023)、三木(2023)などのように、コメディやドラマ・アニメ・小説・「よくある状況」などの創作的なメディアデータを利用することは、それが想像的であること、さらに、「売れるか」・「面白いか」という市場が作品背景にあるということ完全に排除することができないため、本稿で意図するような日常で接するインポライテネス研究の対象となりうるのかを十分に判断することができない。加えて、ある口論がストーリー上の伏線などになっているなどの、大きなコンテキストをとらえる必要なども生じるため、局所的な分析に困難さを生じさせることも、また不足である。

さらに、一部の哲学的議論(柏端, 2016)が議論の前提としたり、池田(2018)が部分的に指摘するように、事実に対しての話者の「認識」や「意図」を問題とした途端に、Ryle (1949=1987)が指摘するような“話者の内的・認知的側面と、意図は行動からしか見えないとする行動主義とが交互に(バトミントンの)羽根を打ち返すような論争”に巻き込まれてしまうのである。

しかし、そもそも我々は、ある発話に対して様々な反応を行っているので(難波, 2018)、ある発話を行う際、それはふつう共同行動(Enfield, 2017=2023)であり、相互行為 interaction である。その点で、森山(2020)や貴戸(2023)が行うような、「ある 1 フレーズの発話が相手を生きにくくさせているのだ」という議論においては、ある特定の発話を行った際に「その発話を行った者が(意図しようと意図しまいと)悪い」と見えてしまうという欠点がある。この点において、まず

話者と聞き手という二元論的分類を考慮しないこと(すなわち、口論を共同行動として見直すこと)、さらに、ある発話一部分ではなく、相互行為としての文脈 context を考慮することが求められる。

以上のことから、口論の研究においては、①詳細な記録を用いるほうがよく、②制度的場面や創作を対象としない方がよい。また、③共同参加が基本の会話であるため、話者と聞き手を二分せず文脈を参照するほうがよい、ということがわかる。これを踏まえて、以下のリサーチクエッションを設定する。

RQ: 創作や制度的場面ではない自然な会話において、「悪態」や「マイクロアグレッション」「感情的やり取り」を除いた場合、口論がおこる相互行為的要因にはどのようなものがあるか。

3. 研究方法

先行研究が抱える課題で指摘したように、口論の研究は①詳細な記録を用いるほうがよく、②制度的場面や創作を対象としない方がよい。また、③共同参加が基本の会話であるため、話者と聞き手を二分せず文脈を参照するほうがよい。

滝浦(2023)が述べるところによれば、語用論におけるインボライトネス研究は「聞き手の解釈にアプローチするには会話をベースとした手法が主流となり、会話分析(CA)的なものに大きく傾く」(p.9)としているが、しかし Heritage (2022)がまとめるように、「ある発話の言語行為 Action は、その発話が返答される第3の位置 Third-position まで確定しない」ということを考えると、会話的・会話分析的な手法を用いないことは参加者の指向および参加者のリアリティーから遠ざかることになってしまい、常に方法論上の問題を抱えることになる。

そのため、ここでは①可能な限り連鎖環境を観察すること、ならびに②可能な限り自然発出の会話を観察すること、③研究倫理違反を起こさないこと、の3点を目的として、「悩み相談サイト」で相談された「口論」や「言い争い」の相談のうち、連鎖環境がわかるものを抽出する形で行った¹⁾。具体的な手順としては以下の通りである。

- 1) Yahoo! 知恵袋「カテゴリ：生き方と恋愛、人間関係の悩み」タグを対象とする
- 2) 検索ワード「口論」「喧嘩」「もめごと」で検索し、検索結果順に各200件を調査する(計600件)
- 3) 投稿内で発話を示す記号(「 」)を検索、および発話自体を目視で搜索し、発話・言語的やり取りがわかるものを抽出する(計65件/600件：10.8%)
- 4) 相談のテキストを話者別かつターンバイターンで分析可能なものへと変換する。
- 5) 口論が開始された点を、相談内容からさかのぼる形で会話中に特定する。

6) 特定された発話ラインの特徴を記述し、分類する。

この研究方法においては、確かに、「相談」がテキストとなる方法を用いることは、第1に、事実の記録ではないという点で、すでに話者の想定が入っている。また、第2に、想起によって、相互行為要素・言語要素が欠如している可能性も考えられる。また、第3に、「相談」とはいつでも、言語行為的にはこれを通常【共感要求】として取ることが求められている場合もある。そのため、「事実」が相談者の都合の良ように改変された可能性も否めない。

一方で、「何が口論か」は、例えばコーパスデータなどでその関係性を考慮できない場合においては、さらにその認定が難しくなることが考えられる。そのため、「相談」によって記されたこと自体が話者の認識であると考えれば、その認識への接近という点ではメリットであるといえるのである。また、これはある種の「語り」を分析すること(村上, 2023)という点で、類似している。

さらに、相談者には、「私が悪いのでしょうか」などと相談を行う際に、そのやり取りを適切に記述するような社会的規範があることにも注意したい。事態について中立に記述しなければ、どちらが悪いかを判断することは困難になるだろう。実際に、この手の相談は「(相談者にとっての)事実を記述する」と、「それに対する相談者の見解」を述べることで構成されることが多く、「相談者にとっての事実を記述する」パートのみを用いることである程度事態への接近は可能である。

また、周辺的なメリットではあるが、調整は必要であるが、すでに文字化されていることも、データ分析上は効率的である。さらに、「相談する」という文脈において必要な背景情報があることは、特に他者の口論を分析するには重要になるだろう。

以上のことから、確かに、観察の際に注意が必要とされるが、一方で、分析・記述を考慮すれば解消が可能であるともいえるのである。

4. 分析と考察

分析・記述の結果、会話冒頭において口論が開始される場合の言語行為的要因には、5つのタイプがあることがわかった。順に分析と記述を行う。

4.1 疑問詞の使用によって【非難】するタイプ⁽²⁾

一つ目のタイプは、疑問詞が用いられた際、それが【非難】行為に聞かれるタイプである。最も端的なデータには以下のようなものがある。投稿者である「私」は算数の宿題をしていたが、母に手伝ってもらっている場面である。

データ1. 「なんで出来ないの？」⁽³⁾

01 私: ((算数ができない))

02 母: → なんで出来ないの？

この場合、疑問詞の使用は第1に「できないことの原因を【問う】」行為として用いることは可能である。しかし、このデータにおいて、投稿者「私」にとってこれは「できないことを責めている」という【非難】に聞かれている。

次のデータも同種である。妊娠中の相談者である「私」が里帰り出産のために帰省している際、夫が不摂生であることを指摘して口論に発展するものである。02行目は不摂生に対して注意を行おうとしているが、「どー(すんだ): どう」という疑問詞を用いている。それは、「怒ってもものんきに笑っている」というところから、02行目を「反省すべき行為」、すなわち【非難】(ないし注意)として産出したことがわかる。一方、03行目の反応が「笑い」であることは、これを【非難】(ないし注意)として聞かないこと、すなわち「はぐらかし」を行っているといえる。04-07行目は、03行目で失敗した行為の「やり直し」といえるだろう。

データ2. 「妊娠中の私より太ってどーすんだ！」⁽⁴⁾

01 ((これまでダイエットに協力して夫をやせさせてきたが、里帰り出産中にどんどんと太る夫。久しぶりのビデオ通話で顔が丸くなっていた。))

02 私: → 妊娠中の私より太ってどーすんだ！

03 夫: ⇒ ((「私」が怒ってもものんきに笑っている))

04 私: これから子供も生まれるのに自己管理ぐらい

05 しっかりしてほしい。病気になって

06 早死にされても((困る。))

07 家族に迷惑だと思わないの？

08 夫: 死亡保険にはいってるし、僕が死んでも

09 お金が入るから大丈夫だ。

10 糖尿になったときのために医療保険にも

11 入っとくよ！

このデータにおいて、03行目で「私」はすでに夫に“怒って”いることが相談サイトには表されている。このことから、疑問詞を用いることは【非難】(ないし注意)行為を行う手立てにもなっていることがわかる。

このタイプのより戦略的な利用として考えられるのが以下のデータである。ここでは、ビルの管理人と投稿者(「私」)の言い争いが題材となっている。

データ3. 「どこの誰が停めてたんだ」⁽⁵⁾

- 01 私: ((来客用駐車場のスペースに間違えて駐車してしまった))
 02 管理人: → どこの誰が停めてたんだ。
 03 母: ((母が謝罪する))
 04 ((その後も悪態な態度をとり、父が苦情を言う。))

02行目の管理人の発話に注目する。ここで、その発話形式には「どこの」「誰が」という疑問詞が2つ用いられている。ここで重要なのは、すでに「住人である私」が駐車したことが明らかとなるときに、疑問詞を用いた発話が行われていることである。

この発話を質問-応答連鎖の発話の第一連鎖成分として聞く際、言語形式上問われている答えとして適切になるのは「ここの私が停めています」であると思われる。いっぽうで、それが不適切な応答であることは母語話者の想像に難くない。相談者の母は実際に謝罪していることから、①すでに誰が停めたかわかっていることを問うていること、②応答が形式に対応したものを求めている際、駐車を【非難】する行為であると考えられることがわかる。

逆に言えば、この発話が口論の起点になるのは、その形式に由来すると仮説可能である。つまり、管理人はここで「この場所には駐車しないでください(【依頼/禁止】)」や、「この場所に駐車されると困ります(【懸念表明】)」などの発話デザインをとることも可能であったが、その選択はとられていない、と理解できる。この場合、これが注意や禁止の行為ではなく、これが【非難】としてとられうるのは、それが「回答が自明な疑問詞」を用いているからだと考えられる。

以上3つの事例から明らかになるように、疑問詞を用いることは、その場で相手を【非難】(場合によっては注意)する行為を行うことである。

4.2 依頼形式を用いていないために、【依頼】以外の行為に聞かれうるタイプ

2つ目のタイプは、【依頼】行為に依頼の言語形式(いわゆる「依頼表現」)が用いられていないことが口論の理由と考えられるタイプである。

次のデータが端的に示している。このデータでは、投稿者「私」は、乳児の母である。家にいる夫と自分のために、昼食を買いに出ることを、01行目に夫に伝える。

データ4. 「昼ご飯を買いに行く」⁽⁶⁾

- 01 私: → 昼ご飯を買いに行く
 02 夫: じゃあベッドで動画見ながら筋トレする
 03 私: ⇒ なんで赤ちゃん見ててくれないの！

この場合、03行目を見ると、「私(相談者)」は、「昼ご飯を買いに行く」を【依頼】行為とし

で見ていることがわかる。これは、「困難やニーズを表示する」ことによって相手からの補助を可能とするやり方(Kendrick & Drew, 2012)とは異なる。この【依頼】行為は、「私(母)がいないとき、赤ちゃんの面倒を見るのは(その場にいない)父だ」という規範に支えられている。この規範を共有していない場合において、夫には01行目の発話は単なる【予定の共有】として聞かれうるだろう。02行目冒頭の「じゃあ」は発話者サイドを語る際に用いられる言語形式であると考えられ、また、実際に02行目で夫は自らの予定を共有している。

このように、【依頼】に依頼形式を用いて言語形式上明確 explicit な形で依頼しないことは、その発話の規範を共有していない者にとっては他の行為として聞かれうる。これが口論の原因となりうる。次のデータで再度確認したい。

データ 5. 「((悪行を重ねる娘を))一度きつく怒ってほしい」

- 01 ((娘の悪行を全く注意しない夫に対して))
02 私: → 一度きつく怒ってほしい
03 夫: あいつがそんな口をたたくのは俺らのせいかな。。。
04 相当ストレスたまってるんだろう
05 私: あんたがちっとも怒らないからだよ！言わなきゃいけないときぐらい
06 バシッと言えよ役立たずが！あんたが怒らないから私ばかり
07 怒らなくちゃならないんだよ！

相談者の「私」は、02行目において娘の悪行(親の財布から金を盗む、SNSで知り合った人に会いに行く、など)をしている娘を「きつく怒る」ように【依頼】しているように見える。しかし、第1にこれは「ニーズ」を述べている(Kendrick & Drew, 2012)間接的依頼であるため、「夫」はこれを03-04行目で「娘が悪行を行う原因予測を述べるべきもの」として、すなわち【相談】行為の一種として受け取ることを可能にして(しまつて)いる。

言い換えれば、「私」は02行目において、依頼形式や依頼表現を用いない【依頼】行為を行っている。これは、夫が遡及的 retrospective に02行目を依頼として受け取らないことを可能にしており⁽⁷⁾、それによって夫は「娘の肩を持つ」ことを可能にしている。

以上で見たように、【依頼】行為についてそれを明示する形式を用いないことは、口論の理由となりうる。

4.3 第一連鎖成分の質問形式での発話が別の行為に聞かれうるタイプ

3つ目のタイプは、ある行為が質問形式でなされる際、その発話が別の行為として聞かれるタイプである。次のデータでは、新型コロナウイルスの流行において手洗いが推奨されていた際、泡の手洗い石鹸を出す機械(ハンドソープディスペンサー)が壊れてしまった。それを妻が買い換えておいたのだが、夫が買い替えに気づかなかったことが口論の理由になっているもので

ある。

データ 6. 「手洗った？」⁽⁸⁾

((ハンドソープディスペンサーが壊れていて、新しいものを妻が買った。))

- 01 妻: → 手洗った？
 02 夫: 洗ったよ。
 03 なんか直ってたね。
 04 妻: 違うよ。
 05 新しいの買ったんだよ。
 06 夫: 何が言いたいのか？
 07 妻: 新しいのにしたんだけど気づくかと思って。
 08 夫: じゃあ「新しいのにしたんだけど
 09 気づいた？」って言えばいいじゃん。

この場合、01行目の「手洗った」はある種の「質問」行為という理解可能性や、「手を洗っていないかもしれない」という感染防止上(すなわち当時の社会的規範)から、【非難】としての理解可能性も持つ。それに対し、夫が02行目で「洗ったよ」と答えることは01行目を「質問」として対処したことを意味する。

07行目の主張から遡及的に分析すれば、これは【出題】行為である。01行目は、最低でも【出題】-【回答】-【正誤判定】が行われるような、3ターン以上を持つクイズの活動の第一連鎖成分である。その意味で、01行目で妻は、ハンドソープディスペンサーが「直った」のではなく「変わっている」ことに「気づく」ことを夫に求めていることが主張される。すなわち、「手洗った？」は、08-09行目に夫の異論提示に類似して「何が変わってるか気づいた？」と言い換え可能であるような発話である。

一方で、それが「疑問」形式であり、「質問」行為としても「非難」行為としても理解可能な場合、この【出題】行為を01行目から導出することは、夫にとって困難を伴うだろう。このように、ある「質問」形式はその行為を確定させることが難しい場合がある。次のデータもまた同様の困難を抱えているように分析できる。

データ 7. 「このサプリメントいつ買ったの？」⁽⁹⁾

((私は妻が精神障害があるのではないかと疑っている))

- 01 私 → このサプリメントいつ買ったの？
 02 妻 賞味期限切れてたの？
 03 私 4月だよ。だからいつ買ったの？
 04 妻 ⇒ じゃあ新しいのこれ飲んで

- 05 ((別のを渡そうとする))
- 06 私 ⇒ そうじゃなくて買った時を聞いているのだよ
- 07 妻 他のと一緒に買った
- 08 私 ⇒ 販売店が古いのを売ってるのは問題だと
- 09 思ったから買った時を聞いているのだよ。
- 10 その買った時はいつだった？
- 11 妻 忘れた

ここで私の01行目は、「質問」形式で話されており、「賞味期限切れていたの？」と返答されている。社会的規範として商品の購入者がその購入の責任の一端を担うとすれば、01行目は妻にとって「賞味期限が切れている」という【非難】や【指摘】として聞かれているといえる。賞味期限がこのデータの段階で切れていたかどうかは、投稿上定かではないが、04行目に妻が新しいものを【提供】していることから、サプリメントの購入やストックを妻が行っていることがうかがえる。

確かに、01行目の私の「質問」行為に回答するために何度も「私」と「妻」のやり取りが成されなければならないことは、コミュニケーションの進行性といった面からも「もどかしさ」を感じるかもしれない。一方で、妻がサプリメント購入やストックの責任を負っているのであるとすれば、01行目を、08行目から10行目に開示されている発話の理由(販売店が古いものを売っているのは問題だと思っていること)として理解することは、他の行為理解の可能性(この場合であれば【非難】や【指摘】行為)によって阻害されるといえるだろう。

これらのことから、ある行為を「質問」形式で行い、行為を明示しない場合において、それは他の規範に基づき別の行為理解を誘発する可能性があり、それは口論の理由となりうるということがわかる。

4.4 別の行為が、これまでの協調的活動に対する【否定】として聞かれうるタイプ

4つ目のタイプは、前方に協調的な活動があり、それを否定するものとして聞かれているという連鎖位置の関係に口論の理由がある点で共通している。

次のデータ8は【提案】という行為の準備としての探す行為が、データ9は兄が母にタオルを渡すという【依頼の実行】が、それぞれその直後に否定されている。

データ8. 「行くとこないのに行かなくていいじゃん」⁽¹⁰⁾

- 01 ((「私」は久しぶりの休みだったので「彼」と一緒に出かけたいと思い、行く先をお互いにスマートフォンで探していたが、なかなか決まらない))
- 02 彼氏: → 行くとこないのに行かなくていいじゃん
- 03 ((私が言い返し、口論がヒートアップしてしまった))

データ9. 「コーヒーにホコリ入るでしょ」⁽¹¹⁾

- 01 ((「兄」が「母」に頼まれてタオルを渡したが、その際に「私」のコーヒーにホコリが入ってしまった))
- 02 私: → コーヒーにホコリ入るでしょ！
- 03 兄: ((兄、驚いてしっかり謝罪する))
- 04 兄: ならもう母さんがタオル渡してって言っても
- 05 二度と渡さない
- 06 ((「私」は「兄」と口論になるが、「兄」の言い分がズレている気がする))

データ8での02行目の「彼氏」の発話は、行き詰った「行先探し」活動の解決策として提案されている。しかし、相談者は、02行目の発話をこれまでの「行先探し」という協調的活動を否定するものとして理解している。

データ9も同様に、「兄」は母親のタオルを渡すという協調的な活動自体ではなく、その活動によって生まれたいわば巻き添え被害 collateral damage に対しての【注意】行為として発話されている。一方で、兄はそれを「協調的活動」全体への【非難】として受け取っている。ここが相談内容にある「私」の感じる“ズレ”となっている。

4.5 非選好応答が直接的に話されているタイプ

5つ目のタイプは、非選好応答(dispreferred response; Pomerantz, 1984)にその特徴が出ないタイプである。「非選好応答」とは、例えば以下のような【依頼】行為に対して社会的に好まれずと共同体において共通理解のある応答のことである。通常、これらの発話は、「遅延されて、長く、間接的に発話される」という特徴を持つ。

作例1：依頼に対する選好応答と非選好応答の違い

- 01 A: 【依頼】「ねえちょっとスマホ見せて」
- 02a B: 【承諾】選好応答「いいよ」
- 02b B: 【拒否】非選好応答「えっと、あーごめんちょっと今使ってるから…」

しかし、この非選好応答の特徴を持たない場合、それは口論の理由となりうる。以下のデータ10は、「喧嘩」と「話し合い」の違いについて、相談者の「私」と「彼」とが意見を言い合っている場面である。このデータにおいて、「私は思うんだけどどう思う？」は形式上・行為上ともに【同意】ないし【謝罪】を要求する行為である。そのため、04行目の選好応答は本来【同意】ないし【謝罪】になることが選好され、そうではない場合においては、慣習的に非選好的特徴が出ることが期待される。

データ10. 「それは話し合いだと思う」⁽¹²⁾

(相手が喧嘩をするたびにトゲのある言葉を吐く)

- 01 私: 喧嘩は相手を傷つけるためにするのではなく
02 相手の気持ちとか考え方を知ったりとか
03 するためって私は思うんだけどどう思う?
04 彼:→それは話し合いだと思う。喧嘩って傷つけあう から喧嘩なんだと思う。

一方で、04行目は【異 - 意見提示】が非選好の応答の特徴を持たないままなされている⁽¹³⁾。

次のデータ11でも同様のことが言える。このデータでは、07-08行目で自己開示、ないし自己卑下のような行為が行われているが、その返答である09行目は非選好的の応答の特徴を含んでいない。

データ11. 「それは無理やわな」⁽¹⁴⁾

- 01 A: 2週間仕事をしたら、反動で動けなくなるため
02 社会復帰が難しい
03 B: てんかんだけやろ?
04 A: てんかんの基盤として ADHD を持っている
05 B: ADHD ってアホってことやろ? ((俺))自身も
06 第三者から指摘された経験がある
07 A:⇒ ((これらの病症・障害を抱えているため))
08 A:⇒ ((俺は))フリーランスしか無理や
09 B:→ それは無理やわな
10 A: お前が決めつけるな、同意さえいらない
11 軽はずみに発言するな、殺すぞ

一般的に【自己卑下】に対する選好応答は【拒否】である。08行目の場合もそのように考えることができる。例えば、「うーん...」「どうなんだろうね?」などということ、相手が「働けない」と言っていることを断定しないことが求められている。断定することは、相手が現在の社会復帰が難しいという“悪い状況”を肯定することになるからである。

にもかかわらず、ここで09行目でBは「非選好応答」を行っている。しかも、遅延や間接的評価などなく【同意】を行っている (cf. Hakulinen and Sorjonen, 2011) のである。

ここには「自己卑下」への返答の難しさが隠れていることも指摘したい。言語形式的に言えば08行目の「無理や」を、Bは「無理やわな」と、同じ語を再利用することで言語形式上での調整 aligning を行っている。そのため、この行為は必ずしも悪意のもとに発せられていないと考えることはできる。一方で、自己卑下に対する非選好応答としては、その特徴が産出されて

いないことは、07-08行目が自己卑下であったということを理解していない可能性、またそのようにとらえられない言語形式でAが発話してしまったことを示唆する。

4.6 考察

これまで5つのタイプに分けて分析を行った。この5つのタイプはどれも「発話された形式」とその「行為」とのずれが口論の理由となっていると結論づけられる。

- 1) 疑問詞の使用によって【非難】するタイプ
- 2) 依頼形式を用いていないために【依頼】行為に聞かれうるタイプ
- 3) 第一連鎖成分の質問形式での発話が別の行為に聞かれうるタイプ
- 4) 別の行為が、これまでの協調的活動に対する【否定】として聞かれうるタイプ
- 5) 非選好応答が直接的に話されているタイプ

一方で、タイプ1において、疑問詞は【非難】として聞かれうる発話デザインとして戦略的に用いられている場合もある。それに対し、タイプ2以降については、選択された言語形式とその行為の理解の双方が口論の理由⁽¹⁵⁾であると考えられる。その意味において、話者が選択した形式に責任が帰属されるのはタイプ1のみであるといえる。

より精確に言えば、タイプ2以降は行為の理解不足と、発話デザインの不十分さを理由とする口論であると考えることができるため、参加者の責任や価値観、性格の悪さといった内的なものに還元する必要をそもそも生じないのである。タイプ2で見るように「お昼ご飯を買いに行く」が【依頼】行為となることや、タイプ3のように「手洗った？」が【出題】行為になることは、発話デザインと行為理解の不十分さ双方が、口論の理由として示唆される。また、タイプ4のように「行くところないのに行かなくていいじゃん」という「解決策の提案」が【否定】行為と混同されてしまうことも同様に、双方の発話の不足を理由としている。

この行為理解と発話デザイン双方の不足は、相談サイトにおいての多くの“回答”が、口論の原因を参加者の「性」や「性格」や「態度」に還元することと背反する。確かに、タイプ1においてはそれが戦略的に用いられているという意味において、参加者の「性格の悪さ」に還元されるかもしれない。しかし裏返せば、まさに「疑問詞」を用いることがある種の意地悪さを演出するのであるし、さらに、開始部においての他のタイプは、いわゆる「誤解」が口論の理由であることを鑑みれば、そのやり取りのほとんどは双方の言語理解および言語使用へと還元されるといってよいこともわかるのである。

5. 結論と課題

本稿では、口論における開始部に着目し、口論がどのように開始されるのかを相互行為の側

面から分析・分類した。ここから、本稿のリサーチクエッションに以下のように答えることができる。

RQ: 創作や制度的場面ではない自然な会話において、「悪態」や「マイクロアグレッション」「感情的やり取り」を除いた場合、口論がおこる相互行為的要因にはどのようなものがあるか。

これに対する答えとして、自然な会話を再生しつつ相談するという場面において、口論がおこる相互行為的要因には、大きく分けてⅠ「疑問詞の(戦略的)使用」とⅡ「言語形式―行為の関係の誤解」のグループがある。Ⅱグループはさらにその形式―行為の関係に基づいて、4つの分類が可能である。

Ⅰ) 疑問詞の(戦略的)使用が口論の要因となるグループ	
1)	疑問詞の使用によって【非難】するタイプ
Ⅱ) 言語形式と言語行為の関係の誤解が口論の要因となるグループ	
2)	依頼形式を用いていないために【依頼】行為に聞かれないタイプ
3)	第一連鎖成分の質問形式での発話が別の行為に聞かれうるタイプ
4)	別の行為が、これまでの協調的活動に対する【否定】として聞かれうるタイプ
5)	非選好応答が直接的に話されているタイプ

図2 本研究で記述された口論の開始理由の種類

調査中においては「アホ」「死ぬ」などの卑語としてのインポライトネスが観察されることもあったが、一方でそれが開始部にみられることはほとんどなかった。この意味において、悪意を持った暴言などの使用と、本稿で見たような誤解などに端を発する口論は、区別が求められるといえるだろう。

また、本稿が援用した会話分析・エスノメソドロジーにはチュートリアル的人格を持つとされている(Garfinkel, 2002)。その意味において、インポライトネスの研究をはじめとする人間の非協同的性質に関する研究は、それを回避したり、自省したりする方法として役立つことが期待される。

本稿には課題もある。より参加者の日常に可能な限り即した研究が必要であることは言うまでもなく、また、別のやり取りを扱う形での追検証も求められるだろう。さらに、本稿が『サイト上における「悩み相談」場面』という文脈を解体してデータに加工したことに対して、そのやり取り自体を相互行為の場においてどのような悩みが共有され、どのように主張や表示が行われているのかのエスノメソドロジカルな分析・記述も可能であると考えられる。

謝辞

本稿は京都橘大学の2021年度の授業「言語コミュニケーション論」、および22・23年度の「日本語学講義Ⅲ(社会言語学)」の議論がもとになっています。活発な議論を行ってくださった受講生の方々に感謝し

ます。また、助言をくださった日本比較文化学会関西支部会員のみなさま、京都橘大学日本語日本文学科ラーニングアシスタントのMさんに感謝を申し上げます。

助成

本論文の2・3節は、2021年度学術研究推進助成費(京都橘大学)、ならびに科研費(科研費番号: 22K13121)の研究成果の一部である。

注

- (1) これについて管見の中で最も類似する研究手法は、野田・野田(2017: 48-49)である。
- (2) これ以降、データ内の行為記述を【 】で示す。Enfield&Sidnell (2022)は、ある行為を手持ちの言語の行為表現に当てはめようとするを binning-style (ビンズメ法)と表現し、この方法は研究者間のコミュニケーションにおいては有効だが、行為の多様な側面を見ることを妨げると非難している。本稿で【 】で示すことは、行為を語るうえで視認性が高いためであり、ビンズメ法を推奨するものではない。
- (3) 高校生です。Yahoo! 知恵袋: https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11271047361 (Retrieved 08/25/2023)
- (4) ただいま妊娠後期に入り里帰り中で夫とは離れて生活しています。Yahoo! 知恵袋: https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q13270946888 (Retrieved 15/11/2022)
- (5) 採め事について一長男です。Yahoo! 知恵袋: https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q10102020420 (Retrieved 08/25/2023)
- (6) 嫁と口論になりました。一生後3ヵ月の赤ちゃんがいるのですが…。Yahoo! 知恵袋: https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q14241918289 (Retrieved 08/25/2023)
- (7) この際、夫が意図的に受け取らないようにしているか、あるいは理解が及ばずに受け取らないようにしているかはわからない。たしかに、動作主が異なる場合においては、「てほしい」は【相談】行為に聞くことも可能であるからだ。例えば、夫に対して「(この場にいない娘に)暗くなる前に帰ってきてほしい」という場合、それは依頼というよりは【相談】行為として聞かれるだろう。ただし、それは参与者の「私」にとってもわからないということに注意したい。ここで重要なのは、そのような受け取り方自体が問題になりうる、ということである。
- (8) くだらない事で旦那と言ひ合いになりました。Yahoo! 知恵袋: https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q11234037141 (Retrieved 08/25/2023)
- (9) 私はよく周りから「人の話を聞いてない」「理解力がない」「頭が悪い」。Yahoo! 知恵袋: https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q14253530764 (Retrieved 08/25/2023)
- (10) 旦那と言ひ合いの末、手を叩かれました。Yahoo! 知恵袋: https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q14254966239 (Retrieved 08/16/2023)
- (11) 口論に弱いので、ご教授お願いしたいです。Yahoo! 知恵袋: https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q14238637039 (Retrieved 08/25/2023)
- (12) 喧嘩と話し合いの違いを教えてください。Yahoo! 知恵袋: https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q10236103485 (Retrieved 08/25/2023)
- (13) データ10は「私」が相談サイトに相談するために行った再生 re-telling であるため、遅延や間接的な言語的特徴がそぎ落とされてしまう場合は否めない。一方で、強く主張できるのは、「私」は相談においてその口論の「内容」のみに注目しており、いわゆる「雑多な」言語的特徴は考慮していないということである。この言語への非着目性は、非選好応答の特徴の有無にかかわらず不理解を起こす可能性を持つ。
- (14) 知人の採め事について、長文になりますが色んなご意見を賜れば幸いです。Yahoo! 知恵袋: https://detail.chiebukuro.yahoo.co.jp/qa/question_detail/q12257181147 (Retrieved 08/25/2023)
- (15) すなわちこれは「喧嘩両成敗」や(口論の理由について)「どっちもどっち」といった場合、その内実の類型化をしたものであるともいえる。

引用文献

〈和文〉

- 上西充子(2019)『呪いの言葉の解きかた』晶文社
- 柏端達也(2016)『コミュニケーションの哲学入門』慶応義塾大学出版会
- 貴戸理恵(2023)『10代から知っておきたい あなたを丸めこむ「ずるい言葉」』WAVE 出版
- 椎名美智(2023)「悪態をつく人々」滝浦真人・椎名美智[編]『イン／ポライトネス』ひつじ書房、pp.197-230.
- 滝浦真人(2023)「日本(語)でイン／ポライトネス研究が必要な理由」滝浦真人・椎名美智[編]『イン／ポライトネス』ひつじ書房、pp.1-26.
- 難波彩子(2018)「聞き手行動をめぐる研究の背景」村上和代[編]『聞き手行動のコミュニケーション学』、ひつじ書房、pp.1-8.
- 野田尚史・野田春美(2017)『日本語を分析するレッスン』大修館書店
- 福島佐江子(2023)「気配りから見るイン／ポライトネス研究」滝浦真人・椎名美智[編]『イン／ポライトネス』ひつじ書房、pp.133-161.
- 古田徹也(2021)『いつもの言葉を哲学する』朝日新聞出版
- 三木那由他(2023)『会話を哲学する』光文社
- 森山至貴(2020)『10代から知っておきたい あなたを閉じこめる「ずるい言葉」』WAVE 出版
- 村上靖彦(2023)『客観性の落とし穴』筑摩書房

〈欧文〉

- Austin, J.L. (1962) *How to Do Things with Words*, Oxford University Press (=1978、坂本百大[訳]『言語と行為』大修館書店).
- Culpepper, Jonathan (2011) *Impoliteness: Using Language to Cause Offense*, Cambridge University Press.
- Depperman, Arnulf, & Haugh, Michael (2022) Action Ascription in Social Interaction. In Arnulf Depperman and Michael Haugh (eds.), *Action Ascription in Interaction*, Cambridge University Press, pp.3-27.
- Enfield, N.J. (2017) *How We Talk: Inner Working of Conversation*, Basic Books (=夏目大[訳]『会話の科学』文藝春秋).
- Enfield, N.J., & Sidnell, Jack (2022) Action and Accountability in Interaction. In A. Deppermann & M. Haugh (eds.), *Action Ascription in Interaction*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.279-296.
- Garfinkel, Harold (1967) *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall.
- Garfinkel, Harold (2002) *Ethnomethodology's Program*, Rowman & Littlefield Publishers, Inc.
- Gergen, Kenneth J. (2009) *Relational Being*. Oxford University Press (= 鮫島輝美・東村知子[訳]『関係からはじまる』ナカニシヤ出版).
- Halulinen Auli, & Sorjonen, Marija-Leena (2011) Ways of Agreeing with Negative Stance Taking. In Tanya Stivers et al. (eds.), *The Morality of Knowledge in Conversation*, Cambridge University Press, pp.235-256.
- Heritage, John (2022) The Multiple Accountabilities of Action. In Arnulf Depperman and Michael Haugh (eds.), *Action Ascription in Interaction*, Cambridge University Press, pp.297-329.
- Kobin H. Kendrick, & Paul Drew (2016) Recruitment: Offers, Requests, and the Organization of Assistance in Interaction. *Research on Language and Social Interaction*, 49:1, 1-19.
- Pomerantz, Anita (1984) Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.57-101.